



Data 2023-49

監督・共同脚本・プロデューサー：
アリ・アッパシ

出演：メフディ・バジェスタニ／ザ
ーラ・アミール・エブラヒミ
／アラシュ・アシュティアニ
／アリス・ラヒミ／スイナ・
パルネヴァ／フォルザン・ジ
ヤムシドネジャド／サラ・フ
ァズィラット／ニマ・アクバ
ルプール／メスパフ・タレブ

👁️👁️ みどころ

イランの聖地マシュハドには、ケバいい化粧の娼婦たちは不要！その殺害は「街を浄化すること」だ。そんな理屈は19世紀のロンドンを席卷した“切り裂きジャック”と同じ。また、殺人の目的が「救うこと」だと主張した『ロストケア』（23年）の介護士と同じだ。バイクで夜の街を疾走する“スパイダー・キラール”のそんな理屈をあなたはどう理解？

それに同調する街の人々の意見がある中、女性ジャーナリストは敢然とその取材に着手！警察の捜査には期待できないと知ると、身の危険を顧みず、自ら“四捜査”まで！その是非は要検討だが、犯人の逮捕、裁判、死刑、その執行の姿は本作でしっかりと！

“ある密約”の存在と、その真相は不明だが、それを含めて、よくぞイランでこんな映画が撮れたもの！関係者一同の勇気に拍手！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■舞台はイランの聖地マシュハド！時代は2001年！■□■

本作を鑑賞した2023年4月24日現在、正規軍と準軍事組織「即応支援部隊」(RSF)との戦闘が続くアフリカ北東部の国、スーダンからの邦人退避作戦が実行されているが、“平和ボケ”した日本国民の関心は薄い。ソ連軍の軍事侵攻によるアフガニスタン紛争（1979-1989年）や、米国によるイラク戦争（2003年-2011年）は人気映画『ランボー・シリーズ』の大ヒット等もあって、それなりに知られているが、イラン・イラク戦争（1980年-1988年）や、イスラエルと周辺アラブ国家との間で展開された第1～4次中東戦争（1948年-1973年）になると、日本人はチンプンカンプン・・・。

そんな今、日本で公開された『聖地には蜘蛛が巣を張る』と題された本作の舞台は、イ

ランの聖地マシュハドと言われても……。ユダヤの聖地ベツレヘムや、イスラムの聖地メッカなら誰でも知っているが、イランの聖地マシュハドは全く知らなかった。本作は、そんなマシュハドを舞台にした映画だが、邦題は『聖地には蜘蛛が巣を張る』、原題は『HOLY SPIDER』だから、何とも意味シシ……。しかも、本作には“下敷き”(?)になったドキュメンタリー映画『そして蜘蛛がやってきた』(03年)があるらしい。しかし、スパイダー・キラーとは？ホーリー・スパイダーとは？

他方、本作の時代設定は2001年。これはアメリカで9.11世界同時多発テロが起きた年だが、イランでは、2000年から2001年にかけて、聖地マシュハドで、殺人鬼“スパイダー・キラー”が16人もの娼婦を殺害した連続殺人事件が発生していたらしい。なるほど、なるほど。すると、本作のテーマは……？

■□■イラン映画の実状は？監督、俳優の実状は？■□■

映画の都ハリウッドは、自由の国アメリカの中でも最大の享楽の街。そのことはステイヴン・スピルバーグ監督の『フェイブルマンズ』(22年)、『シネマ52』(18頁)を見れば明らかだ。また、通称“ボリウッド”と呼ばれ、アメリカ以上の規模を誇るインド映画も、歌と踊りを中心としたものだから(?)、基本的に何でも自由。しかし、思想統制、言論統制の厳しい中国では、映画製作については厳しい規制がある。イランでは中国と同じように思想統制、言論統制があるが、それ以上にイスラム教特有の厳しい宗教統制、とりわけ女性に対する厳しい統制があるから、イランでの映画作りは監督も俳優も大変だ。

本作のパンフレットには「Keywords -About Iran-」があり、そこでは、①(イランにおける)女性、②ミソジニー(女性蔑視・女性嫌悪)、フェミサイド(女性の殺害)③イランでのジャーナリズム、④体制による本作の評価(体制は何に反発しているのか)、⑤近年のイラン映画について、が解説されている。これらはごく一部しか報道されていないが、いずれもチョー深刻な問題だ。

しかして、北朝鮮からの映画が日本で公開されないのと同じように、イラン映画が日本で公開されることは少ない。そんな中、近時日本でもスマッシュヒットしたのがジャファル・パナヒ監督の『人生タクシー』(15年)、『シネマ40』(78頁)だが、本作のアリア・アツパシ監督は如何に？ちなみに、本作のラヒミ役で主演したザーラは、現在イラン映画に出演できないようにされているようだ。

■□■切り裂きジャック vs スパイダー・キラー！犯行の動機は■□■

かつて、1888年のイギリス・ロンドンで“切り裂きジャック”事件(当時は“ホワイトチャペルの殺人鬼”)として有名になったのが、娼婦のみを狙った連続殺人事件。その被害者は計11名だったが、確実に切り裂きジャックによる犯行だとされるのは、そのうちの5件だけらしい。しかも、その事件は未解決のまま、現代における“切り裂きジャック”の逸話は歴史研究、民間伝承、偽史が混ざりあったものになっているようだ。

それに対して、2000年から2001年にかけて、マシュハドで発生した連続殺人事

件の被害者は計16名。その犯人が「スパイダー・キラー」と称する男サイド（メフディ・バジュスタニ）であることは、本作が始まってすぐに明示されるので、切り裂きジャック事件とは大違いだ。映画の冒頭から犯人を明示する手法は、先日見た『ロストケア』（23年）（『シネマ52』217頁）も同じ。また、殺人の目的が「救うこと」だった『ロストケア』と同じように、本作での娼婦の殺害目的は「街を浄化すること」だから、問題の本質は奥深い。

しかして、サイドとはどんな人物？なぜ彼は、「街を浄化するため」と称して（信じて？）次々に16人も娼婦たちを殺害したの？

■□■もう一方の主演は女性ジャーナリスト、ラヒミ！■□■

『ロストケア』の一方の主演は、松山ケンイチ演じる「彼らと彼らの家族を救うため」と称して多数の“要介護者”を殺害する男だったが、もう一方の主演は、自分自身も母親の介護問題を抱えながら懸命の捜査でそんな犯人像にたどり着く、長澤まさみ演じる女性検事だった。それと同じように（?）、本作の一方の主演は、本作への出演がキャリアにとって大きなリスクになることを覚悟の上で出演を決断した俳優、メフディ・バジュスタニだが、他方の主演は女優ザラ・アミール・エブラヒミ。彼女は本作のアソシエイトプロデューサー、キャスティングスタッフとして参加したにもかかわらず、予定されていた主演女優が撮影が始まる1週間前に、「怖くなったのか、辞退した」ために、自らが演じたのが女性ジャーナリストのラヒミだ。

スパイダー・キラー事件の直後には、イラン人ジャーナリスト、マジアル・バハリによるドキュメンタリー映画『そして蜘蛛がやってきた』が制作されて大きな反響を呼んだそうだが、そこには当時裁判中の犯人サイド・ハナイ本人も出演していたらしい。したがって、スパイダー・キラーと呼ばれた殺人犯と、それを取材した女性ジャーナリストという関係は歴史上のれっきとした事実だが、予定されていた主演女優の代わりにラヒミ役として本作に出演することになったザラは実に適任。『ロストケア』では犯人の男にあれこれと振り回されながら、また戸惑いながら、それでもしっかりと連続殺人犯を追い詰めていく検事役を長澤まさみが見事に演じていたが、本作ではザラが女性ジャーナリスト、ラヒミ役として、「ここまでやるか!」という素晴らしい演技を見せてくれるので、それに注目！その演技は、第75回カンヌ国際映画祭女優賞も当然と思えるものだが、ホントにここまでやっていいの？それは次の項であらためてじっくりと。

■□■ラヒミの取材手法は？警察の協力は？■□■

ジャーナリストの使命は取材だが、そこには一定のルールがある他、踏み越えてはならない線もあるはずだ。民主主義の根幹は報道の自由、そして、その根幹は取材の自由だから、民主主義国のアメリカでジャーナリストの活躍を描く映画（名作）が多い。直近では、『SHE SAID シー・セッド その名を暴け』（22年）（『シネマ52』67頁）に見る、2人の女性記者の“突撃取材”が興味深かった。しかし、本作に見る女性ジャーナリ

スト、ラヒミの“突撃取材”や、一種の“囧捜査”とも言える“踏み込み取材”は、すごいと言えすぎいが、ある意味、ホントにこれでいいの？と私は思わざるを得ない。

本作冒頭、スパイダー・キラーを追うため（取材のため）、マシュハドの街にやってきたラヒミが1人でホテルに宿泊しようとするところで、「なるほど、ここはイラン！」と思わされるのは、フロント係から「髪を隠せ！」と言われたり、「女一人だけでは泊められない」とばかりに「満室です！」と告げられるシーンだ。さらに、捜査の責任者である警察官のロスタミ（スィナ・パルヴァネ）を取材すると、「汚れた女たちを聖地から排除している」と公言している犯人“スパイダー・キラー”を英雄視する街の雰囲気と同調的なためか、その捜査姿勢は明らかに消極的！さらに、聖職者の判事の下を尋ねると、彼は「態度に気をつけたまえ。特に聖地マシュハドではな」と言ったから、アレレ。ラヒミには、かつてテヘランで酷いセクハラ被害に遭い、それをスキャンダル化されて不当に処分された過去があったが、そんな私的な過去をこの判事は知っているらしい。イランという国は、何という国！さらに、この国の警察や判事はこんなもの！さあ、そんな国で、以降ラヒミは女性ジャーナリストとしてどんな取材を？

■□■取材した娼婦の運命は？犯人の言い分は？■□■

ラヒミの取材が直接街角に立つ娼婦に向かったのは当然だが、そんな場合、娼婦が“取材拒否”するのは当然。しかし、娼婦ソグラだけは、殺人鬼の手がかりを求めるラヒミに対して「皆、怪しい」と力なく呟いていたから、そのココロは？そんな取材の帰り道、ラヒミは何者かのバイクに追跡され、底知れぬ恐怖に襲われることに。

他方、『ロストケア』と同じように本作でも、スパイダー・キラーつまりサイドによるバイクを活用した「街を浄化する」ための娼婦殺しの実態が生々しくスクリーン上に提示される。そこで注目すべきは、サイドは妻と子供たちを愛する夫・父であり、かつ敬虔なイスラム教徒だということ。つまり、戦争で死ねなかった、殉死に値しない自分への絶望と人生の虚しさを抱く彼にとって、娼婦の殺害は「街を浄化する」という使命であり、神に認められるための術だと信じていたし、そう信じることで破綻しそうな自分を保っていたわけだ。もっとも、本作には、そう信じる一方で、始末すべき娼婦に興奮を覚える自分に激しく葛藤しているサイドの姿も描かれるので、その点も注視したい。

新たに発見された遺体はソグラのものだった。ロスタミの配慮で遺棄現場の立ち会いを許されたラヒミは、その遺体がソグラだと知って衝撃を受けたが、そのような“配慮”を理由にラヒミに関係を迫り、彼女の過去を持ち出し威圧的に豹変したロスタミを見てラヒミはビックリ！憤りとトラウマから大混乱したのは当然だが、イランの警察はまさかここまで！さあ、そんな状況下、ラヒミはどうやって犯人の追跡取材を続けるの？

■□■自ら囧捜査を？ここまでの突撃取材の可否は！？■□■

日本の刑事訴訟法の論点の一つとして、「違法収集証拠の証拠能力」がある。囧捜査が「違法収集証拠」になるか否かは難しいところだが、亡ソグラの母親の口から、夜の広場で何

度か目撃されているという、バイクに乗った怪しい男の存在を聞かされながら、「街を浄化している奴を警察が捕まえるか？」という諦めから、警察に証言しようとする母親を見て、ラヒミはある重大な決意を！

それは、自ら囮となって娼婦の姿で広場に立ち、犯人を捜しだすということだが、警察の支援もないまま、そんな危険なことをしているの？ラヒミのそんな決意を応援するのは同僚の記者1人だけだから、ラヒミが万一いつもの手順でサイドの家に連れ込まれた場合の救出は？さらに、そもそも、ジャーナリストのラヒミがそんな取材（捜査？）をしてもいいの？そんな根本問題がある。しかして、ケバい化粧をしたラヒミの前に今、サイドのバイクが停まり、いつものセリフ（？）を吐き、ラヒミを後部座席に乗せて走り出したが、同僚記者の追跡は大丈夫？そんな心配をしていると、案の定・・・。

さあ、その後のスリリングかつ恐怖に満ちた展開は如何に？そこでみるラヒミの演技はまさに主演女優賞にふさわしいものだが、たまたま成功したからいいものの、もし少しでもミスがあれば、ラヒミはソグラと同じような冷たい遺体になって某所に・・・？

■□裁判の焦点は？判決と死刑の執行は？密約の有無は？■□

私はイラン人ジャーナリストが「マシュハド連続殺人事件」をドキュメンタリー映画として制作した『そして蜘蛛がやってきた』（03年）を見ていないが、“法廷モノ”として考えれば、多分、ザーラがカンヌ国際映画祭女優賞を受賞した本作よりも、そのドキュメンタリー映画の方が面白いだろう。だって、そこには犯人のサイド・ハナイ自らが出演して、終始穏やかな表情で女性ジャーナリスト、ロヤ・キャリーミーのインタビューに答えている上、サイドの妻、母親兄弟、息子、周囲の人物たち、さらに殺害された女性の両親やその娘たちも登場しているそうだから、きっと事件の真相や動機の解明に向けては、劇映画たる本作より、そのドキュメンタリー映画の方が優れていると思うからだ。

もともと、本作でも①「街を浄化するため」という宗教的な理由、②神の導きにより娼婦たちを殺害した、③そのことの何が悪い！というサイドの主張は明確に示されているので、サイドを裁く法廷での焦点が何かということとはよくわかる。それは『ロストケア』でも同じだったが、判決は既に歴史上の事実として明らかになっている通り、死刑。しかも絞首刑によるその執行は、日本とは違い、判決確定後の2002年4月8日に刑務所内で執行されたようだ。なるほど、なるほど・・・。

本作ラストに登場する“あっと驚く展開”は、死刑判決を受けてさすがに参っている(?)サイドに対して、担当検事ともう1人のあっと驚く人物が、「これは絶対秘密！2人だけの内緒の話だ！」とした上、“ある密約”の存在を告げること。それは、死刑の執行は表向きのことだけで、サイドはその直前に脱出することができる手はずになっている、というものだからビックリ！北朝鮮ならまだしも、イランでそんなことが本当にあり得るの？

東京裁判で死刑判決を受けた東条英機ら“A級戦犯”たちが、死刑執行の直前までどんな心境で過ごしたのかについては、さまざまな記録が残されているが、サイドのそれは

全く残されていない。しかし、2人からそんな“密約”の存在を聞かされたサイドが、以降、安心して死刑執行日を迎えたであろうことは容易に推測できる。ところが、何と現実には・・・？

それはあなたの目でしっかり見てもらいたいが、パンフレットにある「マシュハド連続殺人事件」では、その点について「ハナイは死の直前まで、自身が処刑されるとは考えていなかったようである。絞首刑が執行される直前、『取引の時と話が違う』と叫んだ声を、その場にいたジャーナリストが聞き取っている。このことから何らかの裏取引があったと推測されるが、真相は明らかではない。」と書かれている。なるほど、なるほど・・・。

2023（令和5）年5月2日記